

五百田家の二兄弟（中編）

陶 易 王

「うん、兄貴も苦労して可哀想だった。あんなに優秀な男を死なすとは惜しい。」

晋吉は心が広くて思いやりがあり、世話好きな、いかにも長男タイプの男だった。子供の性格は遺伝子DNAに付随して生まれてくるものか、或いは後天的に家庭内のステイタスで形成されるのか、判らない。おそらく両方であろう。

次男昭二郎・性同一性障害の章

葬儀が終わり、客がすっかり帰つて誰も居ない応接室で兄、晋吉の遺影を前に昭二郎は、胸の中にぽつかりと大きな空洞が出来たのを感じていた。兄、晋吉は赤紙一枚で軍隊に招集され、満州に着くとすぐに敗戦、ソ満国境でロシア兵に拉致される。そしてシベリアに送られる途中トラックから飛び降りて逃亡し、足を撃たれた。自分は一発の弾丸も撃たず、人間を一人も殺さず、終戦になつた満州の荒野を歩いてやつと大連に到達し、無事故郷に帰り仕事が順調にはかどつて、これからという時に心室瘤が破裂して死んだ。過酷な運命の兄を思うと悲しくていつまでも涙がこぼれてくるのである。

昭二郎の音楽の才能はしば抜けている。父親の貫太郎は音楽好きでピアノ、ヴァイオリン、セロ、フルートなど色々な楽器が沢山家に置いてあつた。父親は、子供らに音楽を強制して習わせなかつた。楽器を置いておけば、才能がありさえすればいじつているうちにいつかは自然に弾ける様になる、と考えていたらしい。事実、昭二郎は教師に習わなくとも、

窓外の楓の葉に雨水が涙の様に流れている。静かな足音がして弟の研三がドアを押して入つて來た。

「兄さん！俺たち兄弟も一人きりになつてしまつたな！」

ガニーニのスタカツトの速い曲を弾きこなすと、今度はセロ

を弾き、バッハの無伴奏奏鳴曲が気に入つて、楽器遍歴もゼロで落ち着いた様だった。低音の楽器は弾く人が少ない。昭二郎は同好会のオーケストラで重宝され、ゼロのパートをずっと受け持つていた。

卒業し、大学病院の消化器外科に入局する。生来指先が器用で積極的な性格が、外科に向いていた。外科手術は競技ではないのに速さを誇る教授がいた事が伝説になつていて。昭二郎の手術は別に急ぐわけでもないのに、無駄なメス運びが無く手術はいつも速く終わり、術中、助手たちに術式や経過を丁寧に説明するので若手の医局員は昭二郎のオペに参加するのを喜んだ。患者の受け持ちは Haupt, Neben, Assistant の3段階で構成され、これに研修医が付属する。手術のチームもほぼ同じメンバーが多い。

執刀は教授、主治医、助手、手術の難易度に応じてそれぞれ決められる。昭二郎は研修中の若手医局員に執刀を譲る事が多かつたので、人気があつた。昭二郎が手術した多数の胃癌患者の中に井手源次が居た。特別の記憶に残る症例の患者ではなかつたが、色々な点で深い関わりを持つた。源次はテキヤの親分だが一見そうと思えない、まるで銀行屋の様な折り目正しい、几帳面な感じの男である。病名を胃癌だと告げる。顔色も変えずに、「手術すれば治りますか?」と聞いた。

「完全に取れれば治るよ。転移が無ければね」「組の若い衆に情報を集めさせたら、外科で手術が一番うまいのは先生だそうですね。私の手術は是非先生に執刀お願ひしたいのです。それから胃癌だという事は私以外誰にも言わないで下さい。胃癌だと知られて、造反する連中が出てくると困ります。」

「執刀医を決めるのは症例検討会議だが、まあご希望に沿うようにしましよう。本人が病名を知らずに家族だけが知っている例が多いけど、貴方は逆ですね。いいでしよう。スタッフには癌でなく難しい潰瘍だつたと説明しておきます。個人情報は守らねばなりませんから」

「それで、手術が終わつたら、先生に背広上下三つ揃いを造つてあげます。」

「いやー、『好意はありがたいが、患者さんからの贈り物は原則として受け取れない』

「それは判ります。でも先生はいつも古ぼけたお下がりの服を着ていいじやないですか。私を手術する先生には、バリッとした服を着てもらいたいのです。」

おかしな見栄だ。

源次の手術はうまくいった。幽門部に発生した癌は脾臓に癒着していたが、根治的にすべて摘出された。術後は順調で一ヶ月後に退院した。その翌日、玄関に大きな箱を抱えた男

が現れた。

「源次親分に頼まれた仕立屋です。ご注文の服を届けに参りやした」

「ああ、仕立屋銀二かね?」

「いいえ、五郎です」

洒落は通じなかつたらしい。着てみると流石仕立屋だ。まるで寸法をきちんと採つてあつらえたみたいにぴたりして

こうして昭二郎と源次との付き合いが始まった。

源次は時々夕方ぶらりと現れて「お仕事終わつたら飲みに行きませんか?」と誘つた。

「いいのかい、酒飲んでも?」

「先生と一緒に大丈夫です。」

こうして時々源次と飲みに行く様になつた。昭二郎は酒が強い。源次も術後なのに結構沢山飲む。

ある日「今日は少し変わつた所にご案内しましよう」と言

う。ついて行くと、入り口は、普通のバーだが入ると一寸雰囲気が違う。綺麗な女性が沢山周りに集まつて「いらっしゃいませ」と愛嬌をふりまく。ソファに座つて周りを取り巻く女性たちを見て、どきりとした。美しい女性たちだが、宝塚の男装美人の感じである。声はアルトで低い。何となく男っぽい。皆綺麗にメイクして不思議なお色氣がある。胸も膨ら

んで女性だと思うが何か普通の女性と違つている。源次がい

う。

「この人はね。お医者さんだよ。私の手術をしてくれた人だ。

皆、特別にサービスを頼むよ」

「まあ、手術なんて怖いわ。病気になつたらよろしくね。私は尚美、あたいは瞳、私は香織、この子は清美」

皆美人ばかりで、囮まれていると気分がよく久しぶりに酔つて、陶然となつた。暫く経つてホステスは皆、男でここはゲイバーだと気がついた。一週間後、源次が病院に術後診察を受けにきた。

「先生、ゲイバーは初めてでしたか? 吃驚したでしよう。

実は先生に打ち明けますが、あつしはもう男ではありません

「えつ、それは、どう言うことだい?」

「数年前、バイクで交通事故を起こし電柱に激突し睾丸が破裂した。緊急手術して取つてしまつたのです。だから男でなくなつた。」

「でもそれは片方だけだろう。もう片方があれば大丈夫だよ」「主治医もそう言いました。でも駄目なんです。性欲が全く無くなつて、勃起もしない。ペニスは小便だけの道具です」「ふーん、少しでも残つていれば大丈夫だけどね。精神的なものじゃないのかね。」

「はい、主治医の先生にもそう言わされました。精神科で色々

カウンセリングしてもらつたけど駄目でした。女房はあつしが男でなくなつたと知るや、さつさと荷物をまとめて出て行きました。女房を満足させてやれなきや男ではないですからね。今はゲイバーとステスのミドリと同棲ではない、同居生活をしています。精神科の先生の話ではセックスレスの夫婦は世の中にゴマンと居るそうですね。私も安心して同居生活をしています。

昭二郎はゲイバーに行つて源次の話を聞き、ゲイに関する認識を改めた。男に生まれて男にしかなれないのは詰まらない。たまには女になりたい人の為に女装クラブがある。

それで数日後、源次の案内で女装クラブに行つてみた。入り口は普通のバーと同じで、カウンターの後ろの狭い通路を通り奥が芝居の楽屋みたいに鏡が並んで更衣室になつてゐる。係りの女性が現れた。

「私は真弓よ、源次親分に頼まれたの。女装を体験させてくれつて。さ、服を脱いで」

真弓が服を脱がせ昭二郎はスッポンポンになつた。すると真弓に身体を撫でられ下腹部にホールが屹立した。これではドレスを着れない。

「まあ元気な人ね。私が宥めてあげるわ」

真弓は昭二郎をベッドに押し倒して上に跨つた。昭二郎は真弓の中に入つたと感じた瞬間、恍惚として放出した。宥め

られてぐつたりした昭二郎の上にタオルを掛けて起き上がつた。

「さてどのドレスにしますか？」

そこにぶら下がつて赤い服を着て鏡の前に立つ。

「わー、綺麗ね、よく似合うわ。外に出てみる？ 誰も男だなんて思わないわ」

「イヤー、止めよう。君に宥めでもらつたら、急に意欲がなくなつた。」

「私はゲイじやない。女よ。普通こんな事はしない。源次が特別サービスしろと言うから」

「ボクは君が好きになつた。君は男？ それとも女？」

「心は男なの。でも身体は女！」

「ふーん、複雑なんだね。ボクと付き合わないか？」

「駄目よ。わたしはゲイじやないから」

その後、仕事が忙しくなつてバー通いは途絶えた。

「暫く見なかつたな。まだバーに通つてゐるのか？」と父が聞く。

「いいえ、医局がとつても忙しくて暇がありません。もうじき学会でその準備が忙しい」

「お前もそろそろ嫁を貰つて身を固めなさい。わしが適當な人を選んでやろう」

「はい、お願ひします」

昭二郎は考える、蝸牛は雌雄同体だが自分の個体内で自家生殖は出来ない。蝸牛Aは自分の男性と、蝸牛Bの女性と結合して子供を作る。人間もこうだと便利だ。

以前、開腹手術した半陰陽^{（ルモア・プロディップ）}の患者が居た。出生時、産

婆さんが泌尿器の奇形を誤認して、男と出生届けてしまつた。開腹所見では発育不全の子宮と、肥大した陰核の下に尿

道があつて男ではない事がわかつた。自分でも奇形を大いに悩み自殺まで図つたが、昭二郎に救われ、米兵に暴行され性器に障害を蒙つた同じ境遇の少女と知り合つて結ばれた。(医芸 38巻 11月文芸特集)

そして一人は、セックスが無くても夫婦生活は可能だと証明したのである。

昭二郎は婚約した。父の友人鈴木内科医院の娘、美也子である。薬大を出て薬剤師として、五百田医院の薬局を手伝つてゐる。幼い頃に母を亡くして、繼母と折り合いが悪く実家を出て、五百田医院の手伝いに來てゐる。心がけの良い娘で医師会の看護学院を卒業して準看護婦の資格も取つて五百田医院の婦長を勤めていた。一年後に昭二郎と結婚する。二人の結婚生活については個人のプライバシーだから分らないが、あまりうまくいってなさそうだった。

結婚しても昭二郎の帰りは遅い。ある晩泥酔して遅く帰り、

父親のベッドに潜り込んで、眠つてしまつた。父貫太郎は書斎、兼寝室で大きなセミダブルベッドに一人で寝てゐる。

朝お手伝いのお浜婆さんが吃驚して「大変！ 旦那様と昭二郎坊ちやまが一緒に寝てゐる」と騒いだ。朝起きて「親爺と添い寝した気分はどうだつた？」

「イヤ骨ばつて固くてかなわん。まるで龍の落とし子を抱いてゐるみたいだつた」と皆噴き出した。

貫太郎が言う。「それにしてもお前、近頃肥つたな。おなかが大きい」「これは腹水です。実は数年前にC型肝炎で死亡した患者の病理解剖をした時に、肋骨の断端で指を傷つけた。そこから感染したに違ひない。それで今肝硬変になりかかつていて。腹水はその為さ。何回か腹水を採つて、薬も飲んで大分良くなつた」

皆ぞつとした。

「その事は、美也子さんは知つてゐるのか？」

「結婚前に話しました、でも彼女は淋病とか梅毒でなければ許せると言いました。C型肝炎の恐ろしさを認識していないうまくいってなさうだった。この病気は治療しても中々治らない。最後は肝臓癌になる。でも慢性疾患だからすぐに死ぬわけでもないでしょ

う」と昭二郎も樂觀していた。

だが病変は思つたより早く進行していた。

ある日、彼が遅く帰宅すると喉元に生唾が沸いて、こみ上げてくる不快感に襲われた。これは吐くと思つて洗面台に駆け寄つた。両腕に鳥肌が立つた。それが全身に広がつたと思つた瞬間、喉元から逆流した血液が洗面台に飛び散つた。口を閉じて堪えると、今度は鼻孔から噴出した。あまりにも激しい勢いで止めようがなく両手を突つ張つて、洗面台に顔を伏せた。

潰瘍の出血でなく何処か血管が切れたような激しい出血の流れかただつた。暫くそのままでいると、血圧が下がつたのであるうか、流血は自然に止まつた。タオルで口を押さえて起き上がりようとしたが、ふらふらして起き上がりがれない。よろけながら床を這つて处置室のベッドに倒れこんだ。そこにベコチヤンが現れたので、か細い声で

「済みません、血圧を測つて下さい。点滴の用意もして」

「まあ大変、顔が真っ白だわ。脈も触れない。婦長さんすぐ来て！」

美也子が飛んできた。

「すまない。研三に電話してすぐ帰つて来るよう。それから外来の引き出しにあるブレイクモナー・カテーテルを消毒してくれ」

間もなく400ccバイクの爆音が聞こえて、研三が帰つてきた。

「済まない、食道静脈瘤の破裂で大量出血した。今は血圧が下がつて一時的に止まつてゐるが必ず又出る。カテーテルを食道に挿入してバルーンを膨らませてくれ。点滴の中に止血剤とピツイトリンも入れてほしい。今度出たら命取りだ」

昭二郎は食道静脈瘤出血で死亡した患者の断末魔を多數見ているので、覚悟を決めた。体位をファウラーにしてもらい、膝の上にノートパソコンを載せると、今回の病状経過を細かく記録して、遺書を書いた。

貫太郎が様子を見に来た。手をしつかり握る。

「お父さん、親不孝ばかりしていまして。お許しください。

今度出血したらもう最後です。遺書を書きました。後で読んで」

言い終わると手を顔に当てた。手の上に涙が流れた。二人はそのままじっとしてゐる。いつの間にか現れた美也子がベッドの足元に蹲つて泣いていた。

翌日、研三は内視鏡を用いて静脈瘤の硬化療法を試みたが、成功せず再出血して、血液はカテーテルの傍を伝わつて床にまで流れた。

昭二郎は紙の様に真っ白な顔で意識を失つたまま、ついに回復しなかつた。

(この章おわり)